

議 事 録

会 議 名	令和元年度 第2回 教育課程編成委員会
日 時	令和2年2月6日(木) 15:00~17:30
場 所	中央工学校OSAKA 1号館 51教室
参 加 者	[委 員] (敬称略) 小松原 学、猪木 洋子、小坂田 昌広、田中 由之、 田尻 元子、岩尾 美穂、中嶋 潤(欠席) [関係職員] 中野 吉晟、中村 聖吾、中島 征治、平上 秀明、原 充介、 戸澤 まり子、西村 宜晃(司会)、岡野 和生、成田 雄大、 吉田 知恵(記録)、檜崎 悟志、上本 佳直
内 容	1. 令和元年度 第2回 教育課程編成委員会 司会の西村 宜晃職員が開会の挨拶を行い、教育課程編成委員会が開会した。 (ア) 配布資料の確認 西村 宜晃職員から、本日の配布物の確認を行った。 (イ) 学校長挨拶 (1) 中野 吉晟校長から本校における現状について報告があった。 ・卒業成果製作発表会が滞りなく終了した。今年は新しい試みがあり、2名の学生が自分の作品を意匠登録したいという動きがあり、折衝を進めるなど積極的な姿勢が見られる。 ・学校関係者評価委員会の開催後1か月後に、2級建築士の合格発表があり18名が合格した(本校の合格率76%)。全国の合格率平均では22%の中、研究科を開設して以来、最高の合格率となった。 ・10月末には、生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪に初めて参加し、本校校舎を丹下健三の作品として一般公開したが、大変好評だった。

・2020年3月末を持って、退職することを報告する。次期校長として、中村 聖吾現教務部長が就任することが決まった。

(2) 中村 聖吾教務部長から、学校関係者評価書について報告があった。

- ・評価項目は全体的確であるという評価を頂いている。
- ・内容については資料の4ページ以降に記載している。

(3) 平上 秀明学科長より、令和元年建築系の度教育について報告があった。

・緑地祭に代わるイベントについて

生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪に参加した。来場者数は、関係者を除いて125名となり、想定より盛況であった。当日の来場者については、昼前の時間帯が多く、来場者年代については40～50代が多かった。内容は、パネル展示やクイズラリーや映像放映等を行った。日本センチュリー交響楽団との連携も行い、PRを行った。学生には、外部の建築物を見学に行かせ、レポートを課題とした。講師によるツアーも実施した。

配布した資料には、会場の様子などを掲載している。実施にあたり若い教員も会合に参加したり等、良い経験となった。また、学生によって作成したパネルは、現在校内に設置している。他校には真似のできないイベントを開催できたと思っている。

・2級建築士の合格率について

7月7日(日)学科試験、9月15日(日)に製図試験が実施されたが、本校の合格率は76%となった。

・卒業成果制作発表会について

昨年度から、卒業制作発表については事前に作品を選抜した上で、当日のプレゼンテーションによってさらに選抜する方式をとった。一昨年までは全員発表としていたが、方式を変更した理由としては、1人1人の時間が短くなること、作品の完成度が低いものも発表することになり、緊張感が薄れてしまう問題があった為である。

審査については、卒業制作の授業担当講師が一次審査を行い、二次審査では授業担当外の講師によって 20 作品に絞った上で、三次審査では学生による発表を行い、ゴールド賞 1 名・シルバー賞 1 名・奨励賞 4 名を選抜した。(上位 6 名)

・大判 (A1 の印刷) のカラープリンター設置について
6 月末に使用を開始し、課金システムもうまくいっている。導入時は 1 人 1 人に説明することもあったが、卒業制作の作品づくりにも貢献できた。貼り合わせた作品も減り、見栄えも向上した。

(ウ) 令和元年度卒業成果・制作発表会発表作品の見学を実施
平上 秀明学科長より建築学科の作品説明、西村 宜晃職員より住宅デザイン科の作品説明、戸澤 まり子職員よりインテリアデザイン科の作品説明、岡野 和生職員より建築 CG デザイン科の作品説明を行った。

(エ) 意見交換

本日の委員会での意見交換を行った。

(1) 各学科における企業が求めるスキルについて

① 小松原 学委員

生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪では、見学させてもらったが改めて斬新な建築と捉え方を持っていることが垣間見えた。卒業制作の作品からは、担当している先生方のご苦労が見えた。今回のテーマである企業が求めるスキルとしては、企業全てから言われる共通の認識は「マインド」である。何のために勉強するのか? どう生かしていくのか? を考えさせること、そしてやり抜くことだと思う。現状は、教えてもらって当たり前で、やってもらわなければ動けない学生が多いと感じている。

② 田中 由之委員

去年も卒業制作発表会を見学させて頂いたが、賞をとっている学生はいい作品ができていると感じた。作品への想いが見えた。意匠設計としては建築学科の作品が少なかったのは残念だ

と感じた。学生としてのレベルは問題ないが、社会ではプレゼン力・会話のスキルで不足を感じる人が多いので、そういったスキルの開発をしてあげてほしい。卒業設計の仕上がりとしては、建築 CG デザイン科の見栄えはよいが、建築学科の実務的な内容である建築設備コース、施工管理コースの作品も評価をしてあげてほしい。

③ 田尻 元子委員

卒業制作作品では、建築として複合的な知識を盛り込みながら、構造・設備・法的なことも考慮した上で仕上げる難しさがある中、キャッチーな部分だけでなく現実的に建つのかを精査しているところは、素晴らしいと思う。施工や設備の計算をした作品についても、実際に計画に入る前の段階として実務でも行われるので、実務を教える専門学校としては良いと思う。生徒には達成感も感じられたらと思う。こういった作品も評価をしてあげたい。

④ 岩尾 美穂委員

プレゼンボードが美しいと感じた。私は、設計したプランに色彩計画を立てる仕事をしている中で、提案する時には見た時の印象が大切である。今年の作品は見た目も美しくまとまっていたと思う。学生に伝えたいことは、企業と話をしていると感じる事として、いかに自分と違う価値感や望まれていることを理解できるか、傾聴姿勢が大切だと思う。生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪への参加は良いことだと思った。外部での人とのふれあいや他の人の作品を見ることで視野を広げることは良いことだと感じた。

⑤ 小坂田 昌広委員

私の会社は施工会社で、特に人手不足を感じているが、いかに人に来てもらえるかの環境を整えていく努力をしているのが現状。2年間のカリキュラムの中では、社会に出る前の準備期間として捉えていただき、社会人としての面も教育していただきたい。卒業制作を見ても、目を引くのは色があるもの（視覚）や BIM など新しいツールを使っているもので、賞を取りやすいのもわかるが、評価する人間が明確な評価基準を持って、熱意とや

る気と発想を伸ばして頂きたい。発想力を鍛えるためにも、悪い面もあるとは思いますが、好きにさせる環境や思ったことを伸ばす機会も与えてあげてほしい。いい悪いは、社会に出てから判断されれば十分であると思う。

⑥ 猪木 陽子委員

作品が自分の分身になると思えるくらいのものであると感じた。完成度よりも夢ややりたいものが溢れる学生は、これからの可能性を感じる。そういった存在は、やはり目を引くし、人をワクワクさせる力がある学生や、情熱や可能性を感じる人材は、どこの企業も求めていると思う。やりたいことをさせ、突き詰めて考えさせることが良い経験になっていると思う。

(2) 質問

平上 秀明学科長：

卒業制作については、建築学科の設計コースでは未完成者が8名いた。試行錯誤しながらやっているが、なかなか難しい。どのようにしたら学生がやる気が出るのか、ご意見はありませんでしょうか。また、専門学校は職業教育が基本であるが、職業的にこういうスキルが将来必要だと感じることは何でしょうか？

① 小松原 学委員

現在、ゼネコンは経営戦略まで入っている。建てるだけではなく、経営戦略まで考えた建築とすることが必要とされてきている。ゼネコンの事務系のメンバーに、経営戦略部門ができていっている。i-Constructionを踏まえた教育も必要になってくるのではないかと。機械化される世の中で、どうコミュニケーションをとるのか等といった視点が必要になってくると思う。

② 田中 由之委員

省エネ計算を学生のうちから勉強しておいてもらえると助かる。

③ 田尻 元子委員

スキルよりも知識にはなるが、色彩についても条例などもあるので、意匠設計をする上で条例などの読み解く力。環境色彩という分野もある。建築系の人でも色彩を知らない実務者も多いように

見受けられる。ユニバーサルカラーデザインにおいても、色弱や色盲の人に対応することは建築でも大切だと感じている。色彩のことを知っていることがすごいではなく、全般的に知っておいてほしいし、求められてくると感じる。

④ 小坂田 昌広委員

コンサル、総合的な力が必要な分野だと思う。事業を起こす人は特に、利益をどれだけ生めるのか？を考えられる人が必要である。しかし、いきなり学生に教えられるものでもなく、興味を持ってもらうのも難しいのではないか。建築のことから少しずつ興味を広げていく方が現実的ではないかと思う。私たち自身も学ばなければいけないくらいである。

現状の社会では、いかに入社してきた人材を辞めさせないようにするかに苦戦しているが、合う合わないもあると思う。いかに学生がやる気になるかを考えてあげること。何か動機付けをしてあげることが必要だと思う。

中島 征治職員：

パンフレット作成する上での質問だが、中央工学校 OSAKA の特徴は何があると感じるか？（他校の卒業生と比べて）

① 小坂田 昌広委員

差異を直に感じたことはない。個人のスキルの違いで変わるだけだと思う。

② 田中 由之委員

比べるにも、弊社では 1 名しかいないので、単純に比較するのは難しい。

③ 田尻 元子委員

卒業生は、メキメキと成長している。

戸澤 まり子職員：

大学など学校による違いは、企業側は意識されているのか？

① 猪木 陽子委員

私のところはないです。人間力を見ます。

西村 宜晃職員：

必要なスキルとして、追加していただくと詰め込み教育になってしまうので、マインド教育が大切だと思うが、半分勉強・半分職場体験（インターンシップ）をするのがいいのではないかと感じている。企業としては可能なのか、また職場体験をさせる上で最低限必要なスキルは何でしょうか。

① 田尻 元子委員

うちは毎日来てもらっても大丈夫だが、「来たい」という意志がある人だけが来るのであれば、可能である。

何が求められるのかは、外に出てみないと分からないし、やってみる事で面白いことに気付いたり、発見がある。転職も減るかもしれない。

中村 聖吾教務部長：

教育課程編成委員会と評価委員会については、任期が2年ということで交代となる。来年度以降も続けて頂けるか改めて伺いたい。

2. 閉会の辞

西村 宜晃職員が閉会の挨拶を行い、教育課程編成委員会が閉会した。

【配付資料一覧】

- ・令和元年度 第2回教育課程編成委員会 次第
- ・平成30年度 学校関係者評価書
- ・令和元年度建築系の教育について
- ・令和元年度卒業制作 1次審査通過作品リスト

以上